

# イタリア古典映画選集

『フォ・ヴァチス』(1912)、『アントニオとクレオパトラ』(1913)や『カピリア』(1914)などに代表されるように、1911年頃から第一次大戦の始まる1914年頃にかけてイタリア映画界では、当時としては壮大なスケールの歴史劇映画が数多く作られ、フランチェスカ・ベルティニ、マリア・ヤコビーニ、ピナ・メリケリ、アムレート・ノヴェッリらの俳優たちが表現力豊かな演技で世界各国の人気を集めていた。一方では、わが国へは未輸入に終わった名作『闇に迷った人々』(1914)や『アッスンタ・スピーナ』(1915)のようにリアルな筆致で現代生活を描写した作品、あるいはポリドールを頂点とする滑稽さを身上としたイタリア喜劇映画も数多く作られて、イタリア映画の古典時代を形成していた。

今回フィルムセンターでは、イタリア文化会館の御協力を受けて、これらイタリア古典映画時代の一端をうかがい知るに足る5番組からなる小特集『イタリア古典映画選集』を上映することといたしました。古典映画を愛好される皆様方の御鑑賞をお勧めいたします。

1981年9月 **フィルムセンター** 後援・イタリア大使館  
 一般250円・学生140円・小人100円

期日	題名	製作年	監督	出演
10月12日(月)	イタリア古典映画名場面集	1910~26	ニーノ・オクシリア他	リディア・ボレリ、フランチェスカ・ベルティニ、マリア・ヤコビーニ他
13日(火)	アッスンタ・スピーナ	1915	グスターヴォ・セレーナ	フランチェスカ・ベルティニ、グスターヴォ・セレーナ、カルロ・ベネッティ
14日(水)	呪の恨	1919	エドゥアルド・ベンチヴェンガ	フランチェスカ・ベルティニ、アムレート・ノヴェッリ、リヴィオ・バヴァネリ
15日(木)	シッパ	1921	ガブリエリーノ・ダヌンツィオ	イダ・ルビシユタイン、アルフレード・パッコリーニ、チーロ・ガルヴァーニ
16日(金)	イタリア古典喜劇映画集	1913	マリオ・ロンコロニ	ポリドール

## イタリア古典映画名場面集

Aspetti di cinema muto italiano

- 今回アンソロジー型式で紹介されるイタリア古典映画名場面集は、次の15作品である。
- 1.『仮面舞踏会』Un ballo in maschera (1910) 5分、出演 A:ニッキ
  - 2.『サタン狂想曲』Rapsodia satanica (1916) 2分、監督 ニーノ・オクシリア 出演 リダ・ボレリ、アンドレア・ハバィ チネス映画
  - 3.『或るピエロの物語』Histoire d'un pierrot (1913) 1分、監督 パルダッサレ・ネグロニ 出演 フランチェスカ・ベルティニ
  - 4.『呪の恨』La piovra (1919) 40秒 監督 エドゥアルド・ベンチヴェンガ 出演 フランチェスカ・ベルティニ、アムレート・ノヴェッリ
  - 5.『一夜の女』La donna di una notte (1930) 1分、監督 アムレート・バレルミ、グイド・プリニョーネ 出演 フランチェスカ・ベルティニ、ルジエロ・ルジエリ
  - 6.『虹を踏む者』L'arzigogolo (1923) 5分、監督 マリオ・アルマンテ 出演 イタリア・アルマンテ・マンツィーニ、アンニバーレ・ペトロネ、オレステ・ピランチャ
  - 7.『父なし』Senza padre (1926) 2分30秒、監督 エミリオ・キオーネ 出演 エミリオ・キオーネ、カリ・サンブチーニ、メアリー・クレオ・タルラーニ
  - 8.『愛国の騎士』Cavalcata ardente (1925) 2分、監督 カルミーネ・ガッローネ 出演 ソヴァ・ガッローネ、エミリオ・キオーネ
  - 9.『ありそうもないこと』L'inversosimile (1918) 3分、監督 カルロ・カンボガリアーニ 出演 カルロ・カンボガリアーニ、レティツィア・クアラタ
  - 10.『メッサリナ』Messalina (1923) 3分10秒 監督 エリッコー・グアッフォネ 出演 リーナ・デ・リグオーロ、アウグスト・マストリビエトリ、ジーノ・タラーモ
  - 11.『ペトリウチェ・チンチ』Beatrice Cenci (1926) 3分40秒 監督 パルダッサレ・ネグロニ 出演 マリア・ヤコビーニ、ライモンド・ヴァン・リエル、フランツ・サラ
  - 12.『マチステの地獄征伐』Maciste all'inferno (1926) 18分、監督 グイド・プリニョーネ 出演 パルトロメオ・パガノ、エレナ・サンクロ、パウリーネ・ポライレ
  - 13.『ポリドールと洋服掛』Polidor e l'attaccapanni (1913)
  - 14.『ポリドールとパン』Polidor e il pane (1913)
  - 15.『ポリドールと猫たち』Polidor e i gatti (1913)

## アッスンタ・スピーナ

Assunta Spina

カエザル・フィルム1915年作品

脚本サルヴァトーレ・ディ・ジャコモ 監督グスターヴォ・セレーナ 撮影アルベルト・G・カルタ 出演者フランチェスカ・ベルティニ(アッスンタ・スピーナ)、グスターヴォ・セレーナ(ミケーレ・ボッカディフオコ)、カルロ・ベネッティ(フェデリゴ・フネッリ)、アルベルト・アルベルトニ(ラファエーレ)、アントニオ・クルイアーキ(アッスンタの父親)、アメリア・チブリアーニ(ペッピーナ)、アルベルト・コッコ(守衛) 日本公開 1918年6月10日 富士館(あらすじ) 風光明媚なナポリの町で父親の手一つで育てられたスピーナは、ヒステリックでわがままな娘で、最初は守衛をしている若い男を愛していたが、或る日、ミケーレと知りあひ彼を恋するようになった。暫くしてスピーナが前の恋人と話し合っているのを知

って強い嫉妬心にとらわれたミケーレは、ナイフで彼女的美貌を傷つけ、直ちに逮捕されて刑務所に入れられた。ミケーレを裁いた判事は、スピーナが洗濯女として独身生活を送っている事を知って彼女に言い寄った。多情なスピーナは判事の求愛を受け入れて2人は結婚した、その後、模範囚として6ヵ月早く出獄することができたミケーレは、その足でスピーナを訪れたが、獄中であつと想い続けてきたスピーナがすでに人妻となっているのを知り、絶望的に怒りに狂って判事を殺して姿をくらましてしまった。これまでの自分の行為が余りにも多情的でありすぎたことを後悔したスピーナは、ミケーレの身替りとして自ら法の裁きを受けるのだった。

## 呪の恨

La piovra

カエザル・フィルム1919年作品

原作V・ブルシロフ 脚色ヴィットリオ・ピアンキ 監督エドゥアルド・ベンチヴェンガ 撮影ジュゼッペ・フィリッパ 美術アルフレード・マンツィ 出演者フランチェスカ・ベルティニ(ダリア・オプロスキ通称シモーネ)、アムレート・ノヴェッリ(ペトロヴィチ男爵通称たかり屋)、リヴィオ・バヴァネリ(マウリツィオ・グラフェンタル通称デ・スルヴィッレ伯爵)、ジョヴァンニ・シュティエニ(フランカヴィッラ侯爵通称ユベール・ド・ヴァルトール) 日本公開 1920年5月8日 帝国館(あらすじ) 両親と早く別れ、祖母の手で育てられた公爵の娘ダリアは、成人してマウリツィオ・グラフェンタルと結婚した。歓楽の巷で放蕩生活を送ったところあるマウリツィオは、一時は美しく着飾るダリアを熱愛したが、彼女の友人フランカヴィッラ侯の親切な態度を誤解し、侯爵を殺害してダリアを離婚してしまう。ダリアは愛する息子が連れ去られたと聞いて夢中に子供の跡を追うが、子供は病死してしまつた。かねてからダリアに横恋慕していた(たかり屋)とあだ名されるペトロヴィチは、執拗に彼女に求愛し続ける。一度は彼の手から逃れて外国に旅立ち、昔なじみのモデルに救われようとしたダリアは、再び悪魔のようなペトロヴィチに脅迫され、痛ましい呪の運命の糸に操られるかの如く彼を恨みのピストルで射殺するのだった。

## シッパ

La nave

ザノッタ・アンプロジオ・フィルム1921年作品 原作ガブリエーレ・ダヌンツィオ 脚色ガブリエーリノ・ダヌンツィオ 監督ガブリエーリノ・ダヌンツィオ、マリオ・ロンコロニ 撮影ナルシッ・マッフェイス 美術グイド・マルッショ 出演者イダ・ルビシユタイン(パシリオラ)、アルフレード・パッコリーニ(マルコ・グラティエーロ)、シロ・カルヴァーニ(セルジョ・グラティエーロ)、マリオ・クレオ・タルラーニ(女執事エマ)、マリオ・マリアーニ(修道士トラバーバ) 日本公開 1922年3月31日 帝国館(あらすじ) 今から1500年ほど前のヴェネツィア。時の為政者オルツ・ファレド口は、ギリシアと利を通じたため人々の恨みを買ひ、為政者の地位を没収されたばかりか、4人の息子たちと投獄されてしまった。国外にいたため難を逃れることができたオルツの弟パシリオラは、帰国して父親や兄弟たちの悲惨な境遇を知り、深い驚きと悲憤の情にとらわれた。こうして、復讐の念に憑かれた美貌のパ

シリオラは、折から外国から帰国して為政者となったマルコ・グラティエーロの前で、得意の舞踏を舞ひ彼の心を魅了し、マルコを誘惑して人々に暴政を加えさせては、父や兄弟たちの怨みを晴らした。やがてマルコの心が彼女から離れて行くのを知ったパシリオラはマルコの弟の大僧正セルジョの心をもその妖艶な美しさと誘惑し、乱痴気騒ぎの酒宴を連日連夜くりひろげ、敬神の念の厚い人々の心を墮落させていった。かくて聖堂は潰れ、神の威力地に墮ち、妖女パシリオラの意を迎えようと相争ったマルコは、セルジョを自らの剣で刺殺した。かねてマルコのために孤島に流されていた兄弟の母エマは忠臣の助けで帰国することができ、今は己れの国を悔めるマルコや町の人々は、自由の海を求め、その唯一の城廓ともいべき巨船「世界丸」を建造し始めた。やがて完成した船にマルコ以下忠実な部下たちが乗り組んでアドリアの海遙かに自由の国を求めて船出する時、自らが犯した恐ろしい罪の数を償うべく美しきパシリオラは自らの命を断つた。

## イタリア古典喜劇映画集

フランスのバテ映画で(ボワロー)という喜劇映画シリーズで大成功を収めた喜劇俳優アンドレ・デードは、1908年イタリアのイタラ社に招かれ(クレティネッティ)と名を変えて2年間大活躍をみせた。これに刺激されて1909年にアンプロジオ社がフリットとブスカポッテ、アクィラ社がト、チネス社がヴォータフィアキスを登場させ、数多くのドタバタ喜劇映画を産出した。そうした喜劇俳優の中心にあつて、1910年からチネス社にあつてトントリーニの名でクレティネッティに匹敵する人気を得ていたフランス生まれのフェルディナン・ギョームは、11年にミラノに移ってコッチウテリと名を変え、更に12年から14年まではバスクアリーニ社でポリドールの愛称のもとに数多くの喜劇映画に出演したが、今回紹介されるのは、イタリア喜劇映画がその頂点に達していた1913年に作られた3本のポリドール主演喜劇映画である。

「ポリドールと洋服掛」Polidor e l'attaccapanni (1913) 余り利発とはいえない田舎者ポリドールが、或るお金持ちの家で催されたパーティのクロウク係りに雇われ、お客様のお召物の扱い方について教えられるが、本番になるとお客様から預ったシルク・ハットを押しつぶしたり、外套をまるめて山積みにしたため、てんやわんやの騒ぎとなり、パーティが終るとクビにされてしまう。「ポリドールとパン」Polidor e il pane (1913) 別の家に雇われたポリドールは、仕事の手始めとしてパン屋へパンを買いにやらせられ、その帰り途で水溜りにパンを落とるとも落ちこんでしまう。泥水からようやく這い出したポリドールは、建築工事現場の傍を通りすぎようとした時、土から落ちてきた漆塗りの粉袋を頭からぶつて真白になったかと思うと、今度は粉石炭を満載した車にぶつかり、真黒になつてしまう。見分けのつかない姿で家に戻つたポリドールは又もやクビにされてしまう。「ポリドールと猫たち」Polidor e i gatti (1913) 或るお金持ちの用人として新しい仕事にやうとあつたポリドールは、主人の飼ひ猫三匹の世話をする事になったが、猫に逃げられてしまう。必死になつて猫を探し廻ったポリドールはサーカス小屋の近くにはいた三匹のライオンの子を猫と間違えて面倒をみたことからチヤンヤの騒ぎが起こる。